

ふれあいのつばさ



- ◇ 『平成30年度の振り返り地点』
- ◇ 『ペインクリニックとは・・・慢性の痛みと向き合うということ』
- ◇ 『第24回 相和会研究発表会』
- ◇ 『献血の実施について』
- ◇ 『職員親睦会主催 バーベキュー開催報告』



～平成30年度の振り返り地点～

私が渚野辺総合病院に就任してから6ヶ月が過ぎようとしています。病院長職の経験があったとは言え、当院に来てからは様々な戸惑いの連続でした。同じ医療の現場なのに、組織の違いがこんなにもあるのかと思いましたが、土屋理事長をはじめ、渡邊看護部長や事務職員のお陰で、何とか概要を掴むことが出来ました。そして、医師やコメディカルの面談や様々な部署の職員からの話を聞くことによって、今すぐに取り組みなくてはならないことや、3年後、5年後を視野に入れて取り組んでいくことなどを検討し、実行中です。

6ヶ月を過ぎ、今年度の振り返り地点となりました。地域に根付いた、また地域の皆様に信頼され、愛される病院を継続できるよう、職員が一丸となってスキルの向上を目指す所存ですが、そのためには職場の環境をいかに安心、快適なものにできるかを念頭に置き、病院長業務に邁進していきたいと思っています。



ペインクリニックとは…

慢性の痛みと向き合うということ

「痛み」は、生体防御反応（痛みを感じることで、身体の異常を感知する反応）の重要な要素であることは、誰しも認めるところです。脳疾患による頭痛ばかり、椎間板ヘルニアなどによる腰下肢痛ばかりです。しかし、こういった痛みの多くは急性痛であり、これら急性痛の多くは、手術や神経ブロック療法、消炎鎮痛薬の内服など、西洋医学的な様々な治療法を駆使してほぼ制圧できるようになってきました。しかし、急性痛が単に慢性化して慢性痛となった場合だけでなく、本来の治癒期間を超え、原因不明の痛みが長期間継続するいわゆる「慢性痛」に関しては、さしもの西洋医学でも治療困難となることがしばしばあります。

ペインクリニックとは、その痛み（ペイン）を専門に治療する診療科で、「疼痛外来」とも呼ばれています。ペインクリニックでは、患者さんの痛みの診断を行って、主として神経ブロックと呼ばれる治療法で対処しています。神経ブロック療法とは、局所麻酔薬を神経または周囲に注射することによって痛みを緩和する方法です。

私がペインクリニック外来での診療を始めて約40年が経過しました。ペインクリニックに従事した頃は、日本におけるペインクリニックの創生期とも思われる頃でした。当時の関東通信病院（現NTT東日本関東病院）のペインクリニック科は、若杉文吉先生を中心に全国から麻酔科を中心として多くの先生方が集まってきており、ペインクリニックにおける梁山泊の様相を呈していました。1980年には雑誌「ペインクリニック」が創刊され、ペインクリニックという言葉が少しずつ理解されてきた時期でもありました。初めて目にし、体験したペインクリニックの治療効果は素晴らしく、ほとんどすべての痛みを征服できるかの如くで、それまで難渋していた痛みを苦しむ多くの患者さんを救うことができたと考えられます。

確かに、急性期の痛みやその痛みが遷延した場合は、神経ブロック療法や抗うつ薬などの鎮痛補助薬を駆使することによって改善する痛みは多いと思われます。しかし、急性痛が遷延したのではなく、慢性に経過した痛みの治療は、さしもの神経ブロックでもその治療はなかなか困難であることも分かってきました。原因の比較的はっきりしている帯状疱疹後神経痛などではなく、その原因すら分からない不思議な痛みは明らかに存在するのです。

私は、今まで多くの慢性痛と向き合ってきました。私は、慢性の痛みには神経ブロック療法だけでなく、患者さんのニーズに合わせた、オーダーメイド的な治療法が必要だと考えています。患者さんに合った治療法のような引き出し（手段）を持ち、それぞれの患者さんに合った治療法を会得する必要があります。現在行っている治療法は、神経ブロック療法が主体ではありますが、鍼灸（YNSA：山本式新頭針療法など）や漢方などの東洋医学、操体法によるストレッチ、スーパーライザなどによる消炎鎮痛療法などなどです。漢方治療は、漢方医学的という「気・血・水」の流れを是正し、身体の内環境を整えることによって、本来ヒトが持っている正常に戻ろうとする力をパワーアップし、痛みを緩和させる働きがあり、更に西洋医学と相補的な治療を行うことで、慢性痛に苦しむ患者さんの治療の一助になると考えています。さらに、他の痛みに対する良い治療法があると聞けば、それが摩訶不思議な治療法であっても、全国どこへでも出かけて教えを請いたいと常に思っています。

患者さんとよく話をし、痛い箇所を目で見、手で触れてその苦しみを共感し、そして患者さんから「少し楽になったような感じがする」という一言を聞くために、今日も痛みとの戦いが始まるのです。

瀧野辺総合病院
病院長 世良田 和幸

第 24 回 相和会研究発表会

平成 30 年 9 月 8 日(土)に第 24 回相和会研究発表会を開催いたしました。発表者数 18 名に亘り、医療や介護の取り組みに関する報告から施設の資材管理についてなど、多種多様な発表がありました。参加者が多くの事を学べる研究発表会は、発表内容に関心を示す職員も多く、質疑応答では施設の垣根を越えて他施設の職員へ積極的に質問し、それぞれの施設で今後の参考にしようとする姿勢が毎回見受けられます。

法人内の他施設との交流というのは、新しい発想やアドバイスを貰える貴重な場であり、施設としての質を互いが高めあえる大変重要なものです。今回の研究発表会での学びを取り入れ、患者さんへ今以上に質の高い医療を提供できるよう、職員一同切磋琢磨する所存です。



献血の実施について

当院では、年に一回職員向けの献血を実施しています。より多くの職員が協力できるように事前に院内通知を行い、当日は神奈川県赤十字血液センターの献血バスに来ていただいています。

前回は平成 29 年 10 月 25 日(水)に実施し、約 2 時間の間に 41 名の職員が献血に協力しました。

今年度は平成 30 年 11 月 16 日(金)を予定しています。

医療に携わる者として『地域医療への貢献』をしていきたいと考える方は多いかと思いますが、いざ行動しようと思うと何をしたらいいか分からないという方もいるかと思いますが。

献血というのは、誰もが気軽に『地域医療への貢献』を行える、医療機関としては協力していきたい取り組みですので、今後とも当院では献血を続けていきたいと考えます。



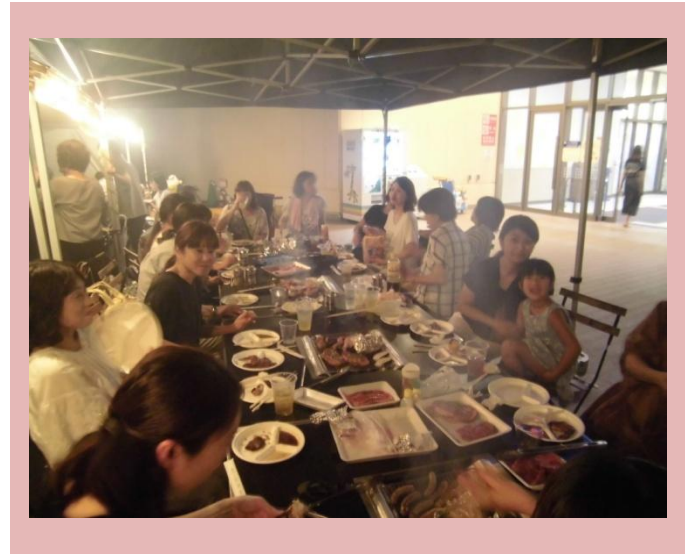


職員親睦会主催 バーベキュー開催報告



平成30年9月1日にバーベキューを開催いたしました。当日はあいにくの雨でしたが、会場はテント完備ということもあり、雨を気にすることなく、大変盛り上がり無事終了。親睦会初の試みとなるバーベキューでしたが、結果は約100名もの参加者が集まり、開催後の感想も好意的な意見が多く、良い結果となりました。

親睦会は、部署の垣根を越えた交流が行えます。職員同士の親交を深め、業務での連携を強くし、病院がより潤滑に機能する為にも、今後も職員が大いに楽しめるような親睦会を開催していきます。



◆ 編集後記 ◆

長かった酷暑もようやく去り、朝夕めっきり冷え込むようになりました。秋は、「食欲の秋」と言われるほど美味しいものが盛りだくさんあります。その中でも私は「栗」が大好きで、モンブラン、マロングラッセなどのスイーツや栗ご飯、栗きんとんなどどれも魅力的です。そこで、今回は秋の味覚「栗」について調べてみました！

栗の旬は品種にもよりますが、おおむね9月～10月だそうです。日本栗、中国栗、アメリカ栗、西洋栗などがあり、日本では古く縄文時代から食べられていたようです。天津甘栗は中国栗で甘くて小粒なのが特徴で、マロングラッセは西洋栗で中粒・渋皮が離れやすく、栗きんとんなどに使われる日本栗は渋皮が離れにくく大粒なのが特徴です。栗は果実の中の堅果類（けんかるとい）に分類されアーモンドやクルミと同じ仲間です。また他のナッツ類よりも脂質が少なくヘルシーです。実りの秋、皆さんも秋の味覚を堪能してみたいはいかがですか。



（ 広報委員 秋元 ）



〒252-0206 相模原市中央区淵野辺 3-2-8

JR淵野辺駅(北口)下車徒歩5分(駐車場あり)

- * 小田急線ご利用の方は町田駅で横浜線にお乗り換え
- * 京王線ご利用の方は橋本駅で横浜線にお乗り換え
- ※快速は止まりませんので、各駅停車にお乗りください

☎ 連絡先 ☎

淵野辺総合病院 (代表) 042-(754)-2222
 相模原総合健診センター (代表) 042-(753)-3301